

## 郵便とトキメキ

大津 隆文

家で過ごす毎日の生活にはルーティンがある。昼食前に郵便受けを開けるのもその一つ。最近が入っているのは大抵パンフレット等の宣伝物か公共機関からのお知らせ位で、個人的な手紙、葉書は滅多にない。

郵便が届くのを今日か明日かとドキドキ待ったり、意外な人から便りを受け取り、何だろうと心躍らせて開けるといふようなことは皆無である。

若い時のあのトキメキはどうして無くなったのであろうか。

一つは当然自分自身の高齢化である。人生全体についてトキメクことがほとんど無くなった。若い日の好奇心、感受性を持ち続けることは難しい。そして交友相手も高齢化しており、手紙のやり取りも余り無い。

もう一つはコミュニケーション手段の変化である。昔は対話以外の連絡手段は郵便しか無いに等しかった。小学校の名簿で電話のある家は一クラス二、三軒で、そういう家がPTAの役員を引き受けていた。その後電話は広く普及したが、それでも遠距離は高いからと通常は夜間割引を利用した。

それがどうだろう。今やメールによって安価に瞬時に連絡がとれる。意思疎通の障害はほとんど無いも同然だ。現代の恋人達は昔より遥かに恵まれている。それだけ幸せであると思うが、失ったものも多少あるかもしれない。

それは離れているがために深まる互いの思いである。昨年大河ドラマ「光る君へ」で、お互い夜、星や月を眺めながら相手を思うシーンが何度も出てきたが、それだけ深まる恋心が印象的であった。

戦国時代の武将間の手紙のやり取りを見ると、複雑な事態を簡潔な文面で意思疎通していることに驚かされる。簡潔な手紙では家康の家臣、本多重次の「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」がよくあげられる。制約された環境の中では言葉が磨かれると同時に、文面の裏まで読み取る忖度の力がつくのであろうか。

俳句も十七文字の世界、言葉を選び、いかに感動（トキメキ）を伝えるかが大切と思う。駄句が浮かんだ。

ときめきの失せし郵便鳥雲に